

モノグラフ・高校生'86

vol. 19 「いじめ」と学校文化



東京学芸大学助教授	深谷和子
武蔵大学教授	武内清
神奈川県立平安高校教諭	穂坂明德
東京学芸大学大学院生	岡部十史子
東京学芸大学大学院生	呉芳蘭

目次

本報告書の要約	2
第I章 「いじめ」の実態をめぐって	6
1. テーマの設定と調査の方法	6
2. いじめの発生状況	7
3. いじめられ体験について	10
4. 加害者としての体験をめぐって	19
5. 傍観者としての体験について	21
6. 生徒たちの「いじめ」観	23
第II章 教室空間のいじめっ子、いじめられっ子、傍観者	25
1. 高校生のいじめ問題	25
2. いじめっ子、いじめられっ子、傍観者の個人的特性	26
3. 「いじめ」における教室空間	31
第III章 「いじめ」と生徒文化、学校文化	36
1. 生徒文化と「いじめ」	36
2. 学校格差と「いじめ」	41
3. 「いじめ」の多い学校、少ない学校	42
資料1 調査票見本	45
資料2 基礎集計表	59

※おことわり 本文中に使用した写真は、本文、テーマとは一切関係ありません。

本報告書の要約



① 調査の目的と方法

小中学生に流行し、昭和60年から61年にかけて社会問題化した「いじめ」の問題を、高校生対象に実態調査のワクを抜け、学校文化とのかかわりでその発生メカニズムを分析してみようとするものである。調査対象は全国の共学の公立高校13校の2年生、男子1,222人女子1,213人計2,435人で、調査時期は昭和61年1月～2月。すべて学校通しのアンケート調査で行われた。

(なお小中段階との比較で用いられている数値は、中学生については福武書店「モノグラフ中学生の世界 vol.22:いじめ、昭和60年」、小学生は同じく「小学生ナウ4-2:いじめ、昭和59年」より引用してある。)

② 「いじめ」の発生率

昭和59年から60年にかけての実態調査によると、小学生中学生で、いじめが大なり小なり発生しているクラスはほぼ5割(2クラスに1クラス)だったが、本サンプルでは、12%(8クラスに1クラス)と、高校での「いじ

め」発生率は激減している。

(p.8図I-1)

③ いじめられやすいタイプ

小・中とかなり共通の人格的特徴が見いだされ、①自分勝手、②不潔、③生意気、④孤立、⑤臆病、となっており、集団になじまず(成員から不快、目ざわりなどの感覚を引き起こすような)かつ弱い人格が特徴的である。(p.9表I-2)

④ いじめられ体験の所有者

高校入学後(ただし2年生の時点で)いじめられ体験をもつ者は3%。これは小中段階(30%と19%)での体験率と比べると大きく減っている。(p.10図I-2)

⑤ 「いじめ」の起こった場所

中学生と同様、クラス内で3分の2、クラス外で3分の1が生じている。(p.10図I-3)
また「いじめ」の加害者とのそれまでの関係も、小中段階とほぼ同様、仲よしから4割

ふつうのつきあいだった子から4割で、もともと仲の悪かった者たちから攻撃が仕掛けられたケースは2割でしかない。(p.11図I-4)

⑥ 「いじめ」の方法

男子はさまざまな方法でいじめられ、暴力、使い走り、金品のカツアゲ、ふつうでないこと(性的はずかしめなど)、万引きなどの要求、などかなり非行性を帯びた行為が見いだされるが、女子の「いじめ」は、「悪口」「無視、仲間はずれ」がダントツで、他の行為はこれらに比べると少ない。(p.12図I-5)

⑦ 担任教師の把握率

その時担任は「いじめ」を「たぶん・絶対」知っていた、とみる者は合わせて4割。小・中とほぼ同率である。(p.13図I-6)

⑧ いじめられていることを他人に話したか

誰かに打ち明けた者は65%と、中学生とほぼ同率である。打ち明けた相手は、男子の場合は周囲の者にとくに偏ることなく打ち明けているが、女子は担任以外は男子よりずっと高率で、とくに「親しい友人」には8割弱の者が「いじめ」を打ち明けている。複数回答なので、とくに女子は、打ち明ける場合、複数の人に打ち明けていると推定される。(p.14図I-7、表I-5)

⑨ 担任教師の対応

担任に打ち明けた時、「いじめ」が止むよう何かしてくれた担任はわずか32%。この数字は小・中の約半分である。(p.15図I-8)

⑩ 過去のいじめられ体験

本サンプルの高2時点でのいじめられ体験

は3%だったが、中学(3~4年前)で13%、小学校(5~6年前)で、17%が、「いじめられ体験」をもっている。(p.17図I-9)小・中のうち最も心に残る「いじめ」はの問いに対して生徒は、小学生時代の「いじめ」58%、中学生時代の「いじめ」42%と答えている。(p.18図I-10)

⑪ いじめられ体験の受けとめ方

「かえってたくましくなった」59%、「自分に勇気があれば何とかできたのに」46%が主な反応である。(p.18表I-10)

⑫ 加害者体験をめぐって

「いじめ」の加害者となった体験は、小学生時代24%、中学生時代20%、高校になって5%と答えられているが、いずれもやや低目に申告されているようである。(p.20表I-11) そのうち、自分が中心でいじめたと答えている者は18%、大部分は「他人につられて」と答えている。(p.20図I-11)

⑬ 自己嫌悪を抱いているか

いじめの加害者となった自分について、当時をふりかえって多少とも自己嫌悪にかられている者は、体験者の約半分でしかない。(p.20図I-12)

⑭ ケンカ両成敗的「いじめ」観

「いじめ」について「いじめは悪いが、いじめられた側にも多少問題があったのだから仕方がない」とする者は、8割にも達している。このような「いじめ」観の修正が必要であろう。(p.21表I-12)

⑮ 傍観者体験をめぐって

高校入学後、「いじめ」を止めに入らず傍観していたと答えた者は12%、その理由の1位(複数回答)は、「自分には関係のないことだから」73%、となっている。

(p.22表I-13)

⑯ 被害者と加害者層の特徴(1)

生徒を「被害者層」「加害者層」「傍観者層」と分けると、被害者には成績が中より上にあるが、友人が少なく、対人関係に問題がある者がねらわれ、加害者層は逆に成績下位だが、明るく活発、協調的で、スポーツの得意な者が多い。(p.26表II-1、p.27図II-1)

⑰ 被害者と加害者層の特徴(2)

被害者は、加害者層よりも小さく萎縮した自己像を描く傾向にあるが、これがいじめの結果かどうかは、このデータだけではわからない。(p.28図II-2) また権威への態度をみても、加害者層は、学校規範や教師の権威に対して逸脱、排斥的であるが、被害者層にはこうしたタテの権威や統制に服従的な傾向が見いだされる。(p.29図II-3)

⑱ 被害者と加害者層の特徴(3)

加害者層に特徴的なのは、自己顕示的欲求(人をあっと言わせたい)やフラストレーション状況がより強く、被害者層の心情には、孤立感、疎外感が特徴的である。

(p.30図II-4)

⑲ 「いじめ」のあるクラスの特徴

「いじめ」のないクラスとあるクラスの違いは、「クラスの雰囲気」「まとまり」「担任の指導方法」である。クラスが明るく、まとまっていて、ルールを守らない生徒ややる気

のない生徒が少ないクラスには、いじめは起こっていない。(p.32図II-5) また疎外感、自己顕示的欲求・フラストレーションも、いじめのないクラスの方に少ない傾向がある。

(p.33表II-2)

⑳ 「いじめ」観とクラス

「いじめ」のあるクラスは、ないクラスよりも「いじめ」は本人に原因があるからだとする意見が多い傾向がある。(p.34表II-3)

また「いじめ」の加害者と被害者では、双方が相手方に原因を求めていることも見いだされる。(p.35表II-4)

㉑ 「いじめ」とクラス風土

いじめられっ子が、「いじめ」の標的として仕立てあげられてゆくプロセスには、個人の特性のレベルを越えて、クラスの中に、「いじめ」がそれ自体悪いことであるという確かな認識が確立していないことが、大きくかかわっているのではないか。

㉒ 生徒文化と「いじめ」

「いじめ」を生徒文化とのかかわりで分析するために、生徒の行動類型を明らかにすることを試みた結果、「勉強型」「エンジョイ型」「反抗型」「孤立型」の4類型が抽出された。(p.38図III-1) これを用いて、「いじめ」の被害者、加害者、傍観者の得点の平均をプロットすると、いくつかの特徴が見いだされた。(p.40図III-5)

㉓ 加害者層の特徴

「いじめ」の加害者は、「反抗型(反学校・仲間志向)」に多くみられる。高校時代の「いじめ」はそれ以前にも増して、学校への不適

応や反抗から行われるケースが多いようである。(p.40図Ⅲ-5)

②④ 被害者の特徴

「いじめ」の被害者は、学校適応はふつうだが、仲間志向が弱く、孤立がちであり、学年が上がるにつれその傾向はますます顕著になる。集団になじまないタイプが「いじめられっ子」となりやすい傾向は、個人主義的で、友人に同調するのが苦手な孤立型の生徒が、「生意気」と決めつけられることで生ずると、説明されるだろう。「いじめ」はまさに日本の風土の中の産物なのではなかろうか。

(p.40図Ⅲ-5)

②⑤ 学校格差と「いじめ」

学校をAランク(4年制大学進学希望率60%以上)Bランク(同59-40%)Cランク(同39%以下)に分けると、「いじめ」は、大学進学率の高くないB、Cランク校で、比較的多く発生していることがわかる。Aランク(進学校)での「いじめ」の発生率は低い。

(p.41表Ⅲ-1)

②⑥ 「いじめ」と学校風土

学校格差による学校の特色や生徒の意識の差(学校風土)は、間接的ではあるが、「いじめ」の発生と何らかのかかわりをもつと推定される。ちなみにAランク校の特色は、受験指導、部活動、学校行事のすべてに熱心で、生徒の自主性が重んじられ、生徒たちの学校生活への満足度は高い。クラスの雰囲気は明るく、まとまりがある。B、Cランクの学校はそれらの諸点において、欠ける部分が多い。(p.42表Ⅲ-2)

②⑦ ケーススタディ的考察

「いじめ」の多い学校と少ない学校の特徴をひろい出すために、13校の中からそれぞれ2校ずつをえらび出して、ケーススタディ的に考察した。(p.43表Ⅲ-3)

②⑧ 「いじめ」をなくすために

②⑦で指摘したことほかに、「いじめ」をなくすための方策として考えられるのは、学校がクラブ・部活動、学校行事、授業などの点において充実をはかり、生徒の学校適応と仲間志向を伸長してゆくことにあるのではないか。

〔調査概要〕

調査対象：全国の共学の公立高校13校の2年生
男子1,222人、女子1,213人、計2,435人

調査時期：昭和61年1～2月

調査方法：学校通しによる質問紙調査

サンプル数

(人)

	535	422	265	1,222
	537	332	344	1,213
計	1,072	754	609	2,435

注(4年制大学志望率 A.60%以上、B.59-40%、C.39%以下)

第 I 章 「いじめ」の実態をめぐって



1. テーマの設定と調査の方法

昭和60年から61年初頭にかけて、社会問題の様相を示したとも表現できそうな子ども社会の「いじめ」の流行も、おとなたちの世を挙げての対応の成果か、次第に下火になりつつある。しかし「いじめ」をはびこらせた土壌とも言うべき子ども社会の変化、すなわち子どもたちの間に人間関係の持ち方の変化や、ある種の対人知覚のゆがみが生じている気配は、未解決のままである。こうした土壌の上に、次にどんな問題が起こるのか、不安を抱かないおとなたちはいないだろう。

「いじめ」についてその実態を明らかにし、解消の手がかりを探るために、このところ数数の調査が行われ、いくつものレポートが刊

行されているが、対象を「高校生」にしほつたものは少ない。そこでわれわれは、このテーマを、現代の高校生の生徒文化とのからみで探ってみることを思いついた。なお福武書店の刊行している一連のモノグラフの中にも、すでに小学生（『小学生ナウ4-2:いじめ』昭和59年）、中学生（『モノグラフ中学生の世界 vol.22:いじめ』昭和60年）対象の調査レポートがあるので、以下は必要に応じてこれらのデータを引用しながら、「いじめ」とそのメカニズムを発達段階的に追って明らかにしてゆきたい。

調査対象は、共学の公立高校13校の2年生、男子1,222人、女子1,213人、計2,435人。

調査時期は昭和61年1月～2月で、学校通しのアンケート調査によって行われた（巻末の調

査票見本参照）。

2. いじめの発生状況

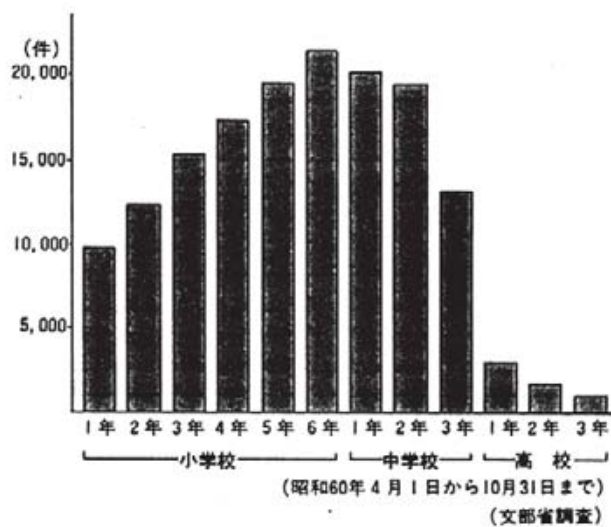
(1) クラス内での発生率

今日の「いじめ」が主として小、中学生の間に起こっている問題であることは、多くのレポートからも明らかである。たとえば文部省が昭和60年4月から10月までの、全国の「いじめ」発生件数を調査した資料によると（付図参照）、小6をピークに中3で発生件数はやや減少し、さらにその後高校で激減している。本報告書の作成メンバーの1人、深谷が、昭和60年5月に行った中学生対象の調査では、中学校のクラス内に「いじめ」が起きているケースは、ほぼ5割（2クラスに1クラスの割合で「いじめ」が発生している）だが、本サンプルでは図I-1に示したように、クラスの男子にいじめがあるクラス9%、女子では6%、男女を問わずクラス内にいじめが起

きているクラスは12%であった。中学から高校にかけて文部省の資料ほどの激減ぶりは示していないものの、やはり「いじめ」が主として中学生段階までの問題であることは明らかである。以下は、この少ないサンプルを対象に、その実態を明らかにしながら、同時にその何倍もの小・中段階での「いじめ」「いじめられ」体験や「傍観者」体験の所有者に、そうしたプロセスの中で生み出された「いじめ観」を探ってみることにしたい。

なお表I-1によれば「いじめ」の加害者は、中学と同様、「クラス（またはクラスの男子・女子）全員から」というより「一部のグループから」が半数前後と多いが、次いで（男子も女子も）「クラスの男子全員から」が多くなっている。中学時代とこの点では少しく様変わりを見せている。また「クラス全体から」

付図 学年別いじめの発生件数



いじめられているケースは、発生クラスの中でも2割弱。小・中に比べればもともといじめの発生率が8クラスに1クラスと少ないのだから、高校生全体を推定してみると2%、

50クラスに1クラスとごく少ないことになる。すなわち「クラス全体でのいじめ」のような幼稚な行為は、高校生になるとごくわずかであると推定される。

図 I-1 いじめの出現率(現在クラス内でいじめられている人がいる)

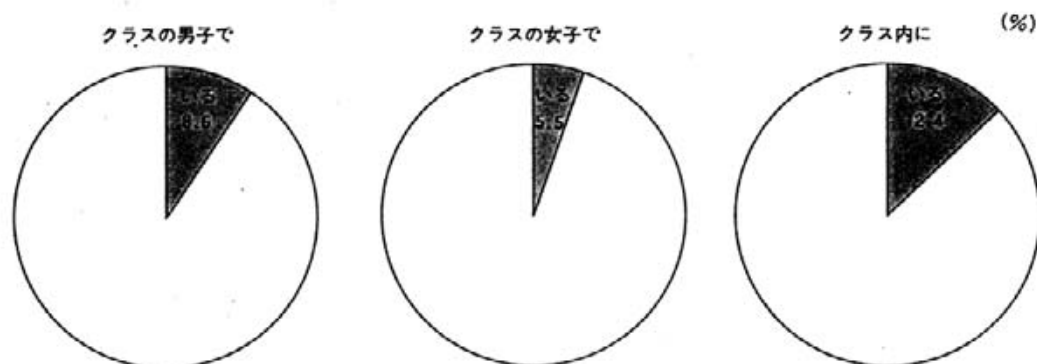


表 I-1 誰からいじめられているか(高校生)

	クラス全員	男子全員	女子全員	一部から	1人から
男子でいじめられている子	14.4	31.5	1.8	43.3	9.0
女子でいじめられている子	16.7	28.3	0.0	55.0	0.0

誰からいじめられているか(中学生)*

	クラス全員	男子全員	女子全員	一部から	1人から
男子でいじめられている子	10.4	15.5	1.6	57.0	15.5
女子でいじめられている子	28.7	11.7	12.3	42.0	5.3

*福武書店「モノグラフ中学生の世界22:いじめ」より引用(以下同じ)

誰からいじめられているか(小学生)**

	クラス全員	男子全員	女子全員	一部から	1人から
6年生	42.0	17.0	7.2	26.8	7.0
5年生	23.4	31.9	3.8	31.0	9.9
4年生	23.0	22.3	3.3	37.3	14.1

**福武書店「小学生ナウ4-2:いじめ」より引用(以下同じ)

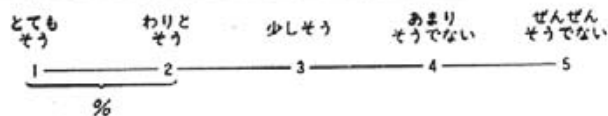
(2) いじめられやすいタイプについて

よく知られているように、「いじめ」にはいじめられやすい人格的特徴があるようだ。生徒たちに高校生で「いじめられやすい」タイプを挙げさせたのが表I-2である。ただし高校生のいじめの発生率の低さを考え合わせると、これらの特徴には高校入学後にいじめを見聞したことのない生徒の場合、中学生や小学生の「いじめられっ子」のもつ人格的

特徴も多分に混入しているとみておかなければならないだろうが、それにしても、結果は表が示すように、小・中の結果とそれほどの違いはない。不動の上位を占めるのは「自分勝手」「生意気」など集団内で反感を買いやすいタイプと「不潔」であり、その下には、援軍を持たない（孤立）状態を含めて弱者の特性が位置し、最もいじめに遠い位置にあるのは、成績にかかわる特性だ。

表I-2 いじめられやすいタイプ

(順位)	高 校 生	順 位	
		中学生	小学生
1. 自分勝手 (わがまま)	54.0	1	2
2. 不 潔	52.7	3	1
3. 生 意 気	50.3	2	
4. 孤 立	46.9	5	
5. 腫 病	44.6	4	4
6. いい子ぶっている	44.4		
7. の ろ ま	39.4	7	3
8. 外見がふつと違う(カッコわるい)	38.6	8	7
9. 運動が苦手	29.7	12	6
10. 先生にひいきされている	28.1		
11. 目立ちたがる	24.2	10	9
12. ガリ 勉	21.3	11	
13. 勉強が苦手	8.7	13	8



3. いじめられ体験について

(1) 高校入学後のいじめられ体験

現在のクラス内での「いじめられっ子」の有無をみて来たところで、次に高校入学後に「いじめられ体験」をもつ生徒がどのくらいいるかをみてゆくことにしよう。

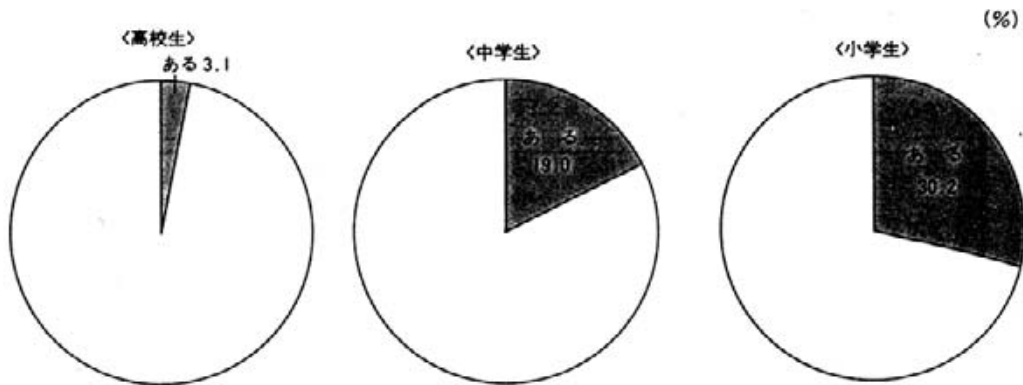
図I-2は、高校入学後に、自分自身いじめにあったことがあるかどうかである。全体ではわずか3%、性差は僅少（男子3.7%、女子2.5%）である。小・中の結果を参考までに掲げたが、学校段階を追って減少してい

ることがわかる。（ただし小学生の数値は、その区別について但し書きはつけたが、現在問題にされている「いじめ」と「ケンカで負かされた体験」等が混入した数値と考えられ、やや数値を割り引くことも必要だろう）

(2) どうやっていじめられたか

また図I-3は「いじめ」の起こった場である。3分の2はクラス内、3分の1がクラス外で起こっており、これも中学生の場合とほぼ同率である。

図I-2 高校入学後のいじめられ体験



*いずれも入学後、小学生の数値は6年生、高校生は2年生の時点。

図I-3 いじめの起こっている場所



また表 I-3 は、加害者の種類だが、やはり「一部のグループから」が55%と多い。またクラス外では部活動で3割が起こっているが、この数値も8ページの計算と同じように、もともと体験者が3%と少なく、そのうちでクラス外では3分の1つまり1%、そしてそのさらに3割が部活動ということで、全体の0.3%しか部活動での「いじめ」の体験者はないということになる。

次に図 I-4 は、中心になっていじめた子と被害者とのそれまでの人間関係である。もともと仲が悪かった相手から仕掛けられた者は2割。ふつうのつきあいだったり仲よしかった仲間からいじめられるケースが圧倒的であり、これが小・中と同様「いじめ」のゲ

ム性を示す数値の一つと思われる。なお発達段階を追ってみると、中学と高校ではほぼ同じ結果だが小学校段階で、やや「もともと仲が悪かった者」からの攻撃が多くなっている。(この点でも小学校段階のいじめが、中・高と違って、ややケンカと混同されていることが推定される)

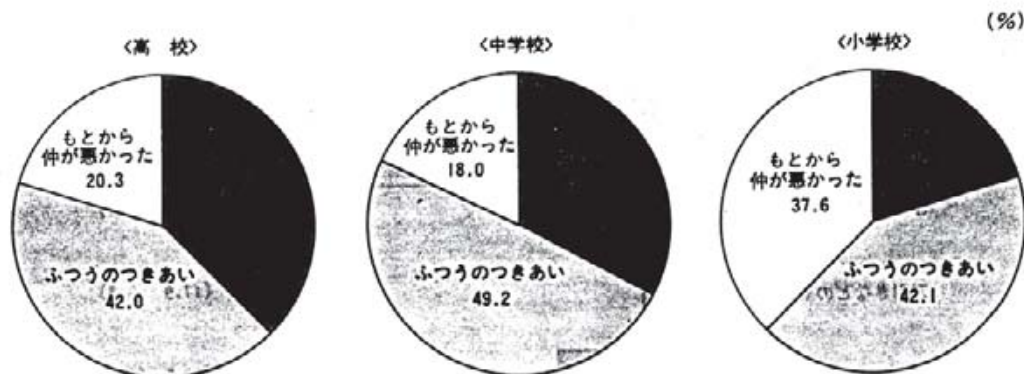
また表 I-4 はこれに関連して、いじめに至った理由をたずねた結果である。「理由もなく対象とされた」がいずれの学校段階でも多いことに変わりはない。

次に図 I-5 はいじめの方法、手口である。小・中の段階から比べると方法が多様化していることが特徴であり、かつ非行性の強い方法がとられていることも特徴である。また性差

表 I-3 誰からいじめられているか

	クラス全員から	男子全員から	女子全員から	一部から	1人から
	17.9	10.7	3.5	55.4	12.5
	同学年グループ	上級生を含むグループ	部活動	その他	
	40.0	23.3	30.0	6.7	

図 I-4 中心になっていじめた子とのそれまでの関係



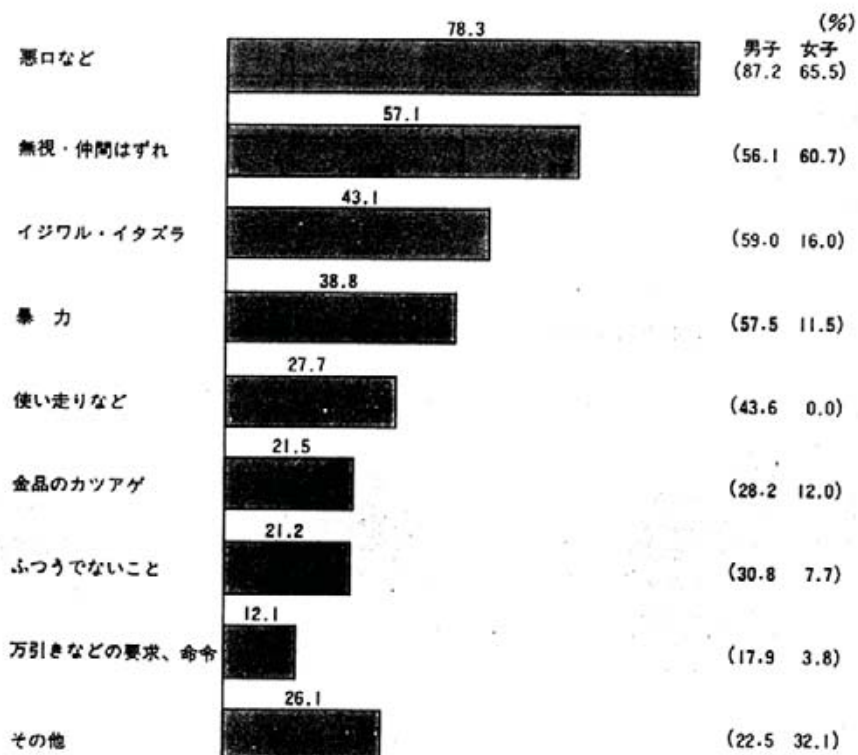
をみると、女子の「いじめ」はほとんどが「悪口」「無視・仲間はずれ」に集中しており、男子に比べればはるかに非行性の度合いが低いことが特徴である。しかし、出現率は低

いものの一部に非行そのものの手口で行われているケースもあることにも留意しなければならないだろう。

表I-4 いじめられた理由

	(%)		
	ケンカして	自分が悪いことをして相手に損失	理由もなく
高 校	21.5	15.4	63.1
中 学 校	13.0	22.1	64.9
小 学 校	14.0	11.8	74.2

図I-5 いじめの方法



(3) 誰かに話したか

「いじめ」への対応のむずかしさは、「いじめ」にあってはいる当人も周囲の者も、それを先生や親たちに話そうとしない点にあるとされる。次にこの点にかかわるデータを見てゆこう。

図 I-6 は、「いじめを担任教師が知っていたかどうか」についてである。「絶対・たぶん知っていた」が4割、「もしかしたら知っていたかもしれない」をあわせても、5割の担任しかこれをキャッチできていないと推測される。この数字は、小・中の数値とも大差はない。「いじめ」が子ども社会にくぐもる問題であり、おとなの目にふれにくく、対応のむずかしい問題であることが、改めて思い知らされるデータである。

次に図 I-7 は、「誰かにいじめられてい

ることを話したか」である。全体の3分の2が誰かしらに話している。数字は中学生の結果と近似している。男子と女子では、男子の方が黙っている割合が高く、これは小・中の結果とも同様である。「いじめられている自分」は、女性像としては「女らしさ」を損なうイメージではないが、「男らしさ」には反するイメージのため、男子の方が寡黙になるのだろう。「男はつらいよ」である。

さて表 I-5 はその「話した相手」である。男子は担任に2割、親や親しい友人に3割弱が話しており、「その他の人に」がこれまた1割強となっている。これに対して女子は、担任に打ち明けた者は少ないが、他は親にも友人にもその他の人にも、男子よりはるかによく話している。とくに親しい友人に打ち明けた者は8割近くに達し、女子における特異な人間関係とでもいう面が見てとれる。

図 I-6 担任教師は知っていたか

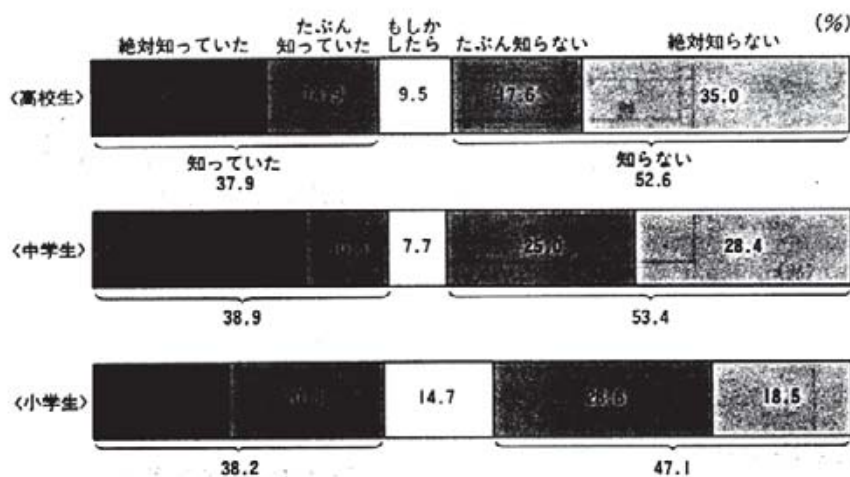


図 I-7 誰かに話したか

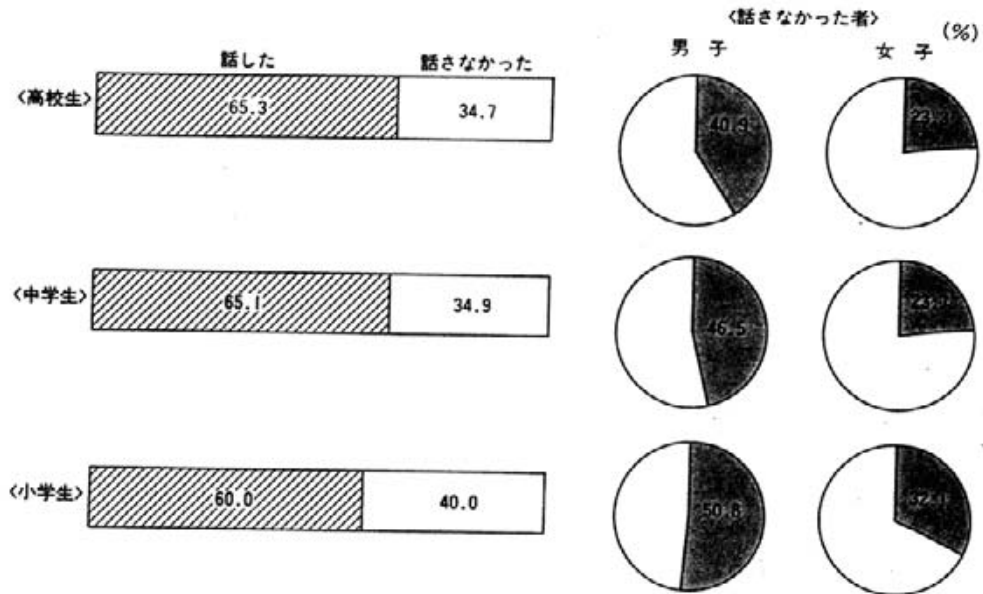


表 I-5 誰に話したか

	男子 (%)	女子 (%)
担任に	23.1	11.5
親に	25.6	34.6
親しい友人に	28.2	76.9
その他の人に	13.9	20.8

(4) 周囲の対応ぶり

さて「いじめ」を打ち明けられた時、周囲の者たちはどう対応したか。どう援助したか。図 I-8、表 I-6、表 I-7 は、担任の対応のしかたである。

図 I-8 によれば、「何かしてくれた」担任は 3 割。残る 7 割は何もしていない (と少

なくとも生徒たちは感じている)。この何かしてくれた担任の数字は、小・中と比べると大幅に低い。小・中では少なくとも 6 割前後が何かしら対応してくれ、「何もしてくれなかった担任」は 4 割にすぎない。成長し学校段階が進むと、生徒と担任の間の距離が遠くなることの表れか。また表 I-6 は、その対応の内容である。小・中だと「学級会」を開い

て話し合うケースが多いのだが、さすがに高校ではゼロ。「いじめっ子に直接注意した」が8割と圧倒的である。小・中とちがって「いじめ」がクラス内のグループダイナミクスに

支えられた問題ではなくなって来ていることを示すものなのだろうか。それとも高校になると教師が生活指導や学級経営に関心を示さなくなるのだろうか。

図 I-8 担任の対応

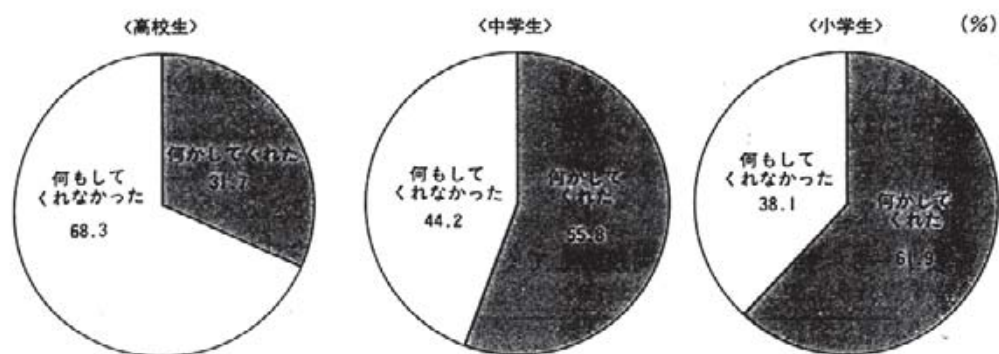


表 I-6 先生は何をしてくれたか

	(%)
いじめっ子に注意	81.8
学級会を開いて話し合う	0.0
その他	8.5

表 I-7 相談した時、担任の言ったこと

	(%)
自分の問題なのだから、自分で解決せよ	17.7
同情とはげまし	12.7
欠点を直すように	11.3
先生が何とかしてみよう	4.8
その他	14.3

(複数回答)

またその折に担任は、何を言ってくれたのだろうか。表I-7によると、担任の反応は極めてクールである。「自分の問題なのだから自分で解決せよ」が18%、「あなたに欠点があるのだから、それを直すように（自業自得?）」が11%、複数回答なので単純な加算はできないものの、残念な数字である。せめて「同情とはげまし」（13%）がもう少しあってもいいのではないか。

表I-8は両親の対応である。さすがに「なくさめ、はげまし」が1位に上がってはいるものの、数字的にはわずか18%でしかない。表中

の他の数字を眺めてみても、どうやら高校生の「いじめ」には、両親の出る幕のないことを示す数字のように見うけられる。

表I-9は、友人の対応である。「なくさめ、はげまし」が41%とダントツに大きな数値であり、「自分を守ってくれた」も18%、「担任に話してくれた」8%、「いじめっ子に注意してくれた」9%などを考え合わせても、高校生にとって「友人」のもつ意味や役割が非常に大きいことが示されている数字とみることができよう。この点は小・中とかなり違ってきている。

表I-8 相談した時、両親のしてくれたこと

	(%)
なくさめ、はげまし	17.7
担任に話す	15.9
自分で解決せよ	11.1
相手に直接注意	8.1
仲よしの友人に頼む	4.8
相手の親に話す	3.2
その他	19.0

(複数回答)

表I-9 相談した時、友人のしてくれたこと

	(%)
なくさめ、はげまし	40.9
自分を守ってくれた	18.2
担任に話す	7.6
自分で解決せよ	7.6
いじめっ子に注意	9.1
その他	19.4

(5) いじめられ体験の受けとめ方

こうしたいじめられ体験は、生徒たちの心にどのような傷を負わせたか、または逆にどんな成長体験となり得たのだろうか。

まず図I-9は過去のいじめられ体験である。小学生時代(5~6年前)に17%、中学生時代(3~4年前)に13%と、高校入学後(現在高2)の体験率(3%)よりはるかに大きな数字が見いだされる。しかし、前出の深谷の調査では、小学生のいじめられ体験保有者30%、中学生19%となっており、いずれも本サンプルの数値を上まわる。これは本サンプルの小中時代であった5~6年前もしくは3~4年前に、それぞれの学校段階に「いじめ」はあったものの、当時は最近ほどの発生率を示していなかったことを示す結果だろう。

図I-10はそのうち、より心に残っている

「いじめられ体験」をたずねたものだが、小学生時代の体験を挙げている者がやや多い。体験率の差を割り引いて考えても、幼くて自我が未確立な段階の方が、より強烈なショック体験となるのかもしれない。

さて表I-10は、それらの体験を現在どう受けとめているか、たずねた結果である。先行研究からいじめられ体験について記述された文章をひろい出し、どのくらい同意できるか、たずねたものである。

全体の中ではこれを「かえって性格がたくましくなった」と成長体験として受けとめる者が多く約6割。これは女子の方により多い反応でもある。次いで「自分に勇気があればもっと何とかできたのに」と自分の弱さをくやむ反応が5割近くで、それ以下を多少引き離している。小学生時代と中学生時代のいじめを分けてその受けとめ方の差をみたのが、右端の数字だが、「思い出だけでゾッとす

図I-9 いじめられ体験



図 I-10 いちばん心に残るいじめ



表 I-10 いじめられ体験の受けとめ方

(%)

項目	尺度		あまりそう 思わない	全然そう 思わない	肯定率男子 肯定率女子	小学生の 時のいじめ	中学生の 時のいじめ
	とても そう思う	少し そう思う					
かえって性格がたくましく なった	30.6	27.9	25.8	15.7	51.2 △ 65.1	57.8	59.7
自分に勇気があれば何とか できたのに	23.1	22.8	29.6	24.5	49.4 △ 43.3	43.4	47.8
自分に原因があるのだから 仕方がない	8.3	26.9	26.7	38.1	31.9 △ 37.6	35.4	35.0
悪い曲解を信じている	12.2	20.5	35.7	31.6	26.7 △ 37.9	28.9	< 39.7
それが原因でいじめられたら ないと思う	9.4	20.6	38.7	31.3	28.2 △ 31.6	28.8	32.5
性格が悪いから	10.7	17.1	24.1	48.1	30.5 △ 25.4	24.2	< 32.9
自分が悪いからいじめられた のだと思う	13.7	13.5	24.0	48.8	31.8 △ 23.2	27.3	27.2

*とても+少しそう思う

る。「性格が暗くなった」の2点は、中学時代のいじめられ体験の方が、反応が大きくなっている。先に図I-10で見たように、小学生時代の「いじめ」の方がより心には残るが、中学生時代のそれは、より大きなダメージを与える性質をもっているのかもしれない。な

お性差の顕著な項目は、「思い出だけでゾッとする」は女子に多く、「先生がもっと何とかしてくれるべきだった」とするのは面白いことに男子に多い。女子の方が「自分に原因があったのだから仕方がない」と責任を引きうける傾向がやや強いことが見いだされる。

4. 加害者としての体験をめぐって

「いじめ」の被害者がいるということは、逆にそこに加害者がいることでもある。おそらく被害者の何倍もの数で。その点にかかわるデータを少し見てゆくことにしよう。

表I-11は、まず「いじめ」の加害者となったことがあったかどうか、である。小学生時代にも中学生時代にもほぼ2割の者が加害者としての体験をもっている。しかしこの数字はわれわれの実感よりかなり下まわる感じがする。「いじめ」が一種の集団的マスメームであるとするならば、加害者はもっと広範囲に及ぶはずである。「いじめに参加したことがありますか」の表現を使ったのだが、ひょっとすると他人事として忘れてしまえるほど当人たちは軽い気持ちでやったのかもしれない。

図I-11は、自分が中心になっていじめたのか、他人につられていじめに参加したのかをたずねた結果である。その比は約1対5となっている。周辺にいる者たちの数はもっと多い気がするのだが。

さてこうした日々のことを、加害者側としてどう思い起こしているのだろうか。図I-12によれば、「全く自己嫌悪にかられている」者は18%と少なく、「少し」を含めてもほぼ5割。「自己嫌悪にかられることはない」者たちとはほぼ同じ割合だ。これだけ「いじめ」が社会的に騒がれ、その非を追及された後の反応にしては、いささか反省が足りないので

はないか。男子よりは女子の方がややそう答えているものの、たいして反省はしていない、その言い分はどのようなものなのか、表I-12をみてみよう。

表が示すように、生徒たちの言い分のうち最も肯定率の高いのは、「いじめた側は悪いが、いじめられた側にも問題があったのだから仕方がない」と自己の立場を正当化する言い方である。とくに女子にはその傾向が強く、また小学校時代の「いじめ」より中学生時代の「いじめ」にそうした主張がなされている。次に多いのは「面白半分で、たいして悪いこととは思わずにやった」である。しかし当時はともかく、今思い出して自己の行為にもう少し責任を感じてもいいような気もする。この二つがほぼ8割と、圧倒的に肯定されている。

残りの反応のうち「社会にこそ責任があり、子どもの側には責任がない」は極めて肯定率が低いが、しかし他の二つ「いじめられた子はその後反省した」(58%)「一種の遊びで被害者もたいして気にしている様子はなかった」(42%)など、あまりに気楽に考えている気配である。とくに男子にそうした傾向がより見いだされるのが気になってくる。おとなたちの世を挙げての騒ぎも、かんじんの子どもたちには、思ったほど伝わっていないのではなからうか。

表 I-11 加害者体験

	(%)		
	男子	女子	全体
小学生時代	27.1	20.0	23.6
中学生時代	25.0	14.2	19.7
高校入学後	7.5	2.0	4.8

図 I-11 「いじめ」におけるリーダーシップ



図 I-12 「いじめ」に参加していた時のことをどのように思い起こすか

	自己嫌悪にかられる (%)		
	全くそう思う	少しそう思う	そうは思わない
<全体>	34.5	47.8	
<男子>	33.4	52.1	
<女子>	35.6	41.9	

表I-12 いじめを回顧して

(%)

目	全くそう思う / 少しそう思う	少しは思わない	肯定率男子 / 肯定率女子	小学校の時のいじめ	中学校の時のいじめ
いじめからいじめが おこる可能性がある	31.1 — 49.7 80.8	19.2	77.5 85.3	23.0	36.1
いじめが おこる原因	34.9 — 41.1 76.0	24.0	80.0 70.4	38.0	31.5
いじめからいじめが おこる原因	26.3 — 31.7 58.0	42.0	54.5 63.2	29.7	23.4
いじめからいじめが おこる原因	14.1 — 28.0 42.1	57.9	48.5 33.2	12.6	14.6
いじめに責任がある	4.9 — 15.3 20.2	79.8	25.4 12.9	4.9	3.9

*全くそう思う

5. 傍観者としての体験について

「いじめ」がこれほど子どもたちの間にはびこったのは、「いじめ」がクラス内で起こっていても、止めに入ることなく傍観する者たちが多いためだったとしばしば指摘されて来ている。いわば現代的な無関心と他人の運命に対する冷淡さの土壌の上に、この非人間的な行為が燃えさかったのであろう。

図I-13は、そうした「傍観者体験」をたずねた結果である。「あなたはこれまでに、いじめに参加はしなかったが、止めに入ることはせず、傍観していたことがありますか」の問いに対して、小学生時代29%、中学生時代37%、高校入学後12%の者が、傍観者体験があると答えている。しかしこの数字も、すでにみて来た加害者体験の数字と同じく、われわれの実感よりかなり低い気がする。もし

もクラスに「いじめ」があれば、子どもの間ではたいていそれをキャッチするだろうから、加害者以外の全部が傍観者ということになるのではなかろうか。それにしても、この数字は低すぎるのではないか。しかし「被害者」「加害者」「傍観者」の他に、子どもたちにしてみれば、「被害者を守ろうとした、助けようとした」側だと自分をとらえる層がいるために、こうした低い数字が出て来たことも考えられる。しかし先ほどからみて来たデータの延長線上でとらえれば、これもまた生徒たちのいささか身勝手な自己弁護という気もする。

さて表I-13は、傍観者の立場に身を置いた理由である。四つの理由を用意してみたのだが、どれにもかなり高い肯定率が示されて

いる。中でやや低いのは「止めに入れば自分が逆に攻撃されそうだったので」(52%)で、約半分の者は「そうではない」と否定している。それよりも主たる理由は、「自分には関係のないことだから」(73%)であり、これが生徒たちの本音なのかもしれない。しかも

その反応は、小学生時代の「いじめ」より、中学生時代の「いじめ」の方にやや肯定率が高くなっている。生徒たちのこうした感覚が、「いじめ」をはびこらせた土壌だったのかもしれない。

図 I-13 傍観者体験



表 I-13 傍観していた理由

理由	割合 (%)			
	小学生の頃	中学生の頃	高校生の頃	高校入学後
自分には関係のないことだから	31.0	35.5	38.1	47.7
止めに入れば自分が逆に攻撃されそうだったので	42.1	33.2	28.9	23.4
他の理由	26.9	30.2	26.8	25.1
合計	73.1	66.8	61.9	52.3

* だいたいそのとおり

6. 生徒たちの「いじめ」観

高校生は子ども時代の終点であるとも言えよう。高校入学後こそ「いじめ」の発生率は低いものの、それまでに数々の「いじめ」を体験して来ているはずである。むろん被害者ばかりでなく、加害者や傍観者の立場にも身を置きながら。そこで生徒たちが、さまざまな体験を通して現在どんな「いじめ観」を形成しているか、みてみることにしよう。

図I-14は、先の設問にも含まれていたが、いわばケンカ両成敗的な「いじめ」正当化の論理である。①「いじめる方も悪いが、いじめられる側にも悪い点がある」のだからいじめられても多少はやむをえない、といったニュアンスが含まれた反応だ。下に掲げた中学生の場合より、多少「いじめる側が絶対悪い」とする者が増加しているものの、それでもわずか17%でしかない。「本人が悪いからいじめられるのだ」は、中学生の12%と比べると半減しているものの、それでもまだ5%はそう考えている者がいる。そして8割近くの生徒は依然として両成敗論的に「いじめ」をみている。やはりごうごうたる世論も、生徒たちの中に届いていないのかもしれない。

生徒たちがこの時点（60年から61年初頭にかけて、いじめによる自殺者が少なからず輩出した直後）ですら、なおかつ「いじめ」を絶対悪としないのは、すでに処々で指摘されて来ているような、われわれおとなたちの子

育ての失敗、すなわち他人の立場に身を置くことに慣れていない自己中心的な子どもたちや、他人に対する共感性の不足した人間を育ててしまった責任を指摘された結果とも言えそう。ありふれた表現だがいわば青少年の健全育成の必要性を改めて思い起こさせられる気がする。

つづいて②は、「おとなの世界にいじめがあるから、子どももまねをしている」に対する反応だが、「とてもそう思う」が2割、「少し」を含めると6割がこれに賛成していることも、前掲の生徒たちの反応と合わせて、気がかりな結果と言えるだろう。

しかし、とは言っても生徒たち自身、これを③「一時的な流行だから、おとなはあまり騒がない方がよい」とするのには、不安を覚えるのだろうか。「そうは思わない」と答えた生徒が半数に達する。やはりおとなたちの側から何らかの対応策が示されることを期待する気持ちがあるのかもしれない。むろんわれわれおとなの側は、とくに60年から61年初頭にかけて、この問題に対してさまざまな手を打って来た。そしてその努力は、さまざまな領域で、現在も続けられているはずである。不幸な流行だったがそれによって抜本的な健全育成策に成功した、という結果が後になって出て来ることを願っているのだが。

図 I-14 「いじめ」観

① 「「いじめ」はいじめる方も悪いが、いじめられる方にも悪い点がある」 (%)

	本人が悪いから いじめられる	いじめられる方にも 少し悪い点がある	いじめる側が ぜったい悪い
<高校生>		77.7	16.9
<中学校>	12.3	74.7	12.5

② 「おとなの世界にいじめがあるから、子どももまねしている」

とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない
20.9	41.9	37.2

③ 「いじめは一時的な流行のようなものだから、おとなはあまり騒がない方がよい」

とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない
12.3	34.5	53.2

表 I-14 いじめが終わったわけ <高校生>

	高 校 生			中 学 生		
	全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子
自分ががんばって相手とたたかったから	21.2	15.7	31.0	16.3	12.1	20.5
自分ががまんしたから	13.7	4.2	32.0	39.5	42.2	36.8
友人の援助	6.8	6.3	8.0	20.6	14.7	26.5
担任の援助	5.1	7.5	0.0	11.6	13.8	9.4
親の援助	1.9	2.9	0.0	6.0	9.5	2.6
クラスや学校が変わったので	20.0	11.8	34.5	12.9	12.1	13.7
そ の 他	23.3	27.7	15.4	15.0	15.5	14.5

第II章 教室空間のいじめっ子、いじめられっ子、傍観者



1. 高校生のいじめ問題

前章でみてきたように高校においては小学校、中学校段階と比較して、いじめられた体験者の割合は低下している。一般的にも高校生ともなれば精神的にも成長し、分別もできて「いじめ」のような小児的な行為はしなくなるものだと思われてきている。しかし、高校での「いじめ」の問題には、小・中学校でいじめ（被害・加害）を経験してきた過去の累積体験が尾を引いているという、もう一つの側面がある。すでにみてきたデータから小・中を単純加算した体験率をみると、たとえば被害者29.5%、加害者43.3%、傍観者65.4%となる。その体験から生み出されたのか、高校段階における「いじめ」で、限定されて

いるがきわめて屈折し、手口も巧妙になって深刻なケースが多くなる。それとともに、いじめの初期の段階にみられる遊びやふざけ半分で行われる、いわば「いじめ」の拡散傾向から特定の生徒が標的にされ、「いじめ」が固定化される傾向も特徴的となる。

確かに学級という場で生徒を眺めると、「いじめ」の標的になりやすいタイプの子どもが同時に、いじめる側に立ちやすいタイプの子どももいる。したがって、「いじめ」に必ずしも直結するわけではないが、いじめっ子、いじめられっ子については、ある意味ではこうした個人のもつ性格ないしタイプをぬきにして考えることはできないであろう。

2. いじめっ子、いじめられっ子、傍観者の個人的特性

そこでまず、高校生の場合、どういうタイプの子がいじめの対象になりやすく（a：被害者）、またいじめに積極的に手を貸したり（b：加害者）、いじめを止めることもしないで傍で見ていような子（c：傍観者）がいるのか、彼らに共通するタイプや特性を探ってみることにしたい。

表Ⅱ-1は、高校に入ってからいじめに関係した生徒を、被害者層、加害者層、傍観者層の三つに分け、成績とクロスさせた結果である。被害者には成績が中間より上位にあるものがねらわれ、加害者層は下位に集まっている。傍観者は、ほぼ中間である。ともすると「いじめ」では、クラスの中でとり残されがちで勉強の苦手な子がねらわれていると思われがちだが、多分に成績上位にある生徒が標的にされてきていることは注目すべきことであろう。

ではもう少し角度を変えて、各層におけるパーソナリティ特性をみてみよう。いじめ発生にはしばしば生徒の能力や性質などが、仲間や学級全体の秩序からはずれていること、

つまり学級の等質的な基盤に立ちえないことから起因することがよくみられるとされる。図Ⅱ-1、図Ⅱ-2は、それぞれ「いじめ」の各層の個人的特性を自己評価したものを図で表したものである。図Ⅱ-1をみると、性格、運動能力、友人関係などすべての項目で、加害者層の生徒は、明るく、活発で、友人関係も協調的であることがわかる。とりわけ肉体的成長の著しい高校段階ともなると、体力面での個人差が大きく現れ、運動能力の優れた加害者層と、いかにも非力そうな被害者層の明暗は明らかである（「スポーツは得意」 b加害者47% > c傍観者40% > a被害者29%）。被害者層の生徒はいじめの標的にしばりこまれてしまったためか、本来そうなのか、友人の数や対人関係の面で加害者に劣りがちである。

それでは現在とはとにかく、将来の見通しについてはどうであろうか。図Ⅱ-2から明らかのように、集計表と調査票サンプルに示した設問でみた職場への適応力、仕事の遂行能力、将来性などの自己評価はほぼ全面的に、被害者層は加害者層より、小さく萎縮した自己

表Ⅱ-1 「いじめ」体験×成績

タイプ	成績 (%)				
	上	中	下	平均	偏差
a	12.3	11.0	35.6	17.8	23.3
b	8.3	20.2	22.2	18.3	31.0
c	6.4	21.7	29.3	21.3	21.3

タイプ
高校に入ってから

- a. いじめにあった
- b. いじめに参加したことがある
- c. いじめに参加はしないが止めに入ることはせず、傍観していたことがある

像を描く結果になっている。

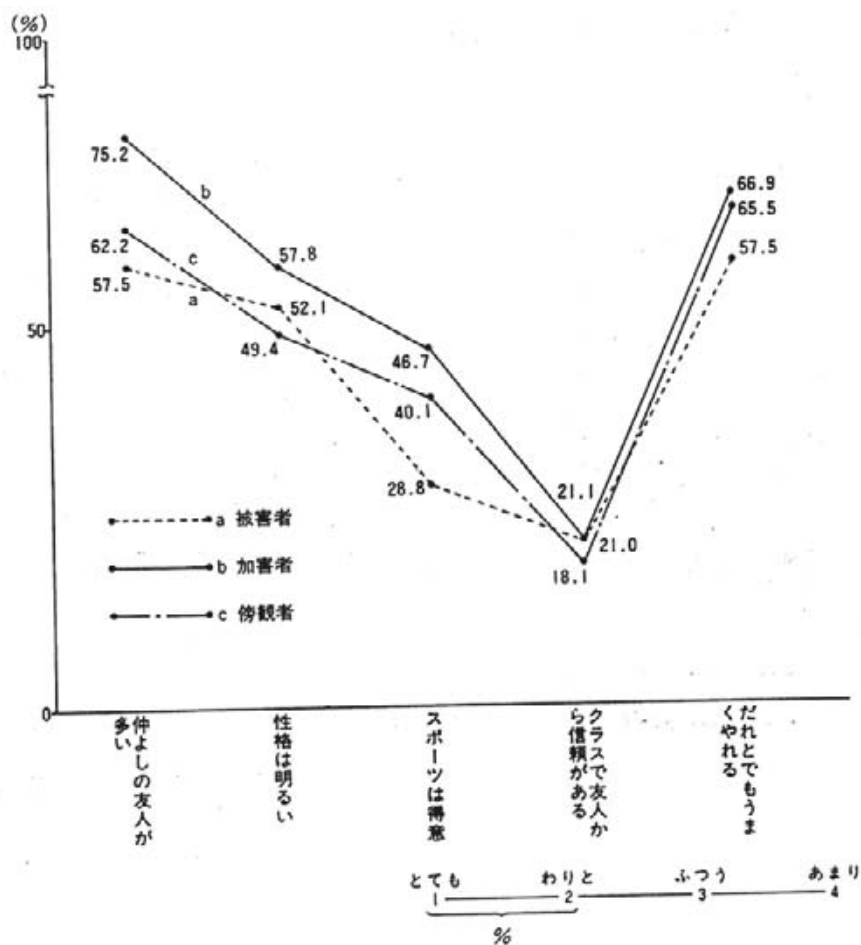
もう一つ、各層の個人特性を知る手がかりとして、学校の権威や規則などの学校規範に対する価値態度をみておきたい。図II-3は、6項目の「権威性」の尺度となる項目を並べて、いじめの各層の価値意識を調べた結果である。加害者層は、「早弁」「代返」「密告」などの学校規範や教師の権威に対して逸脱・排斥的であるが、教師の厳罰主義的な「力」に対しては、被害者層よりある意味での共感を示している。被害者層には、こうしたタテの権威や統制に対して服従的な態度がみられる。

一方、傍観者層は、教師のタテの権威や統

制には拒否的な加害者層の中間に位置しているが、その反面、学校規範にはよくコミットするという、御都合主義的な態度の特徴を示している（「密告」よい a 39% > c 35% > b 22%；「校則を守る」よい生徒 c 69% > a 62% > b 61%）。

こうした「いじめ」にかかわる各層の局面を構成していくと、高校における「いじめ」についての各立場に身を置く生徒の平均像が浮かびあがってくる。彼らは毎日同じ教室空間の中で机を並べているわけではあるが、当然ながら日常生活感覚にもかなりの隔りがあるはずだ。図II-4を通してみると、各層は共通して倦怠感とともに目的喪失状態（「自分

図II-1 「いじめ」体験別個人特性(友人、性格、スポーツなど)

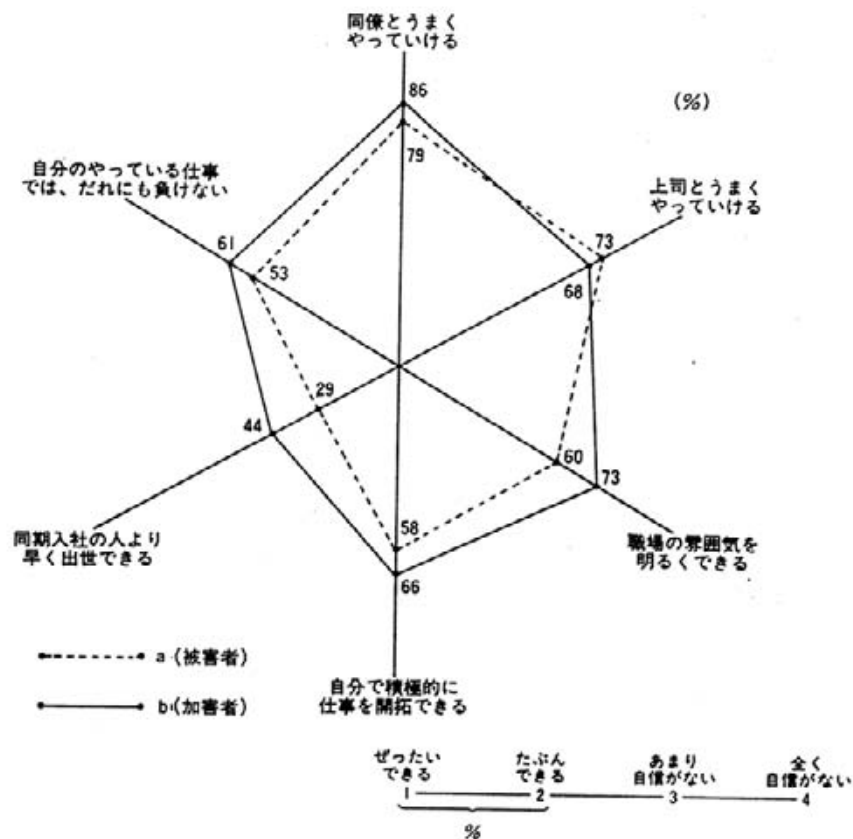


のしたいことがわからない」 a 43%、b 44%、c 48%）に陥っていることがわかる。その上で、加害者層(b)に特徴的なのは、半数以上の者が「自己顕示的欲求」(「人をあっと言わせたい」 b 53% > a 41% > c 40%) や「欲求不満」(「むやみに腹が立つ」 b 56% > a 54% > c 43%) を心の内部に常にかかえていることである。一方、被害者層(a)の心情には孤立感(「どうしようもなくおちこむ」 a 40% > c 29% > b 22%) や疎外感(「自分のことをわかってくれない」 a 33% > c 25% > b 22%) が他の者以上に深まっている。そしてこ

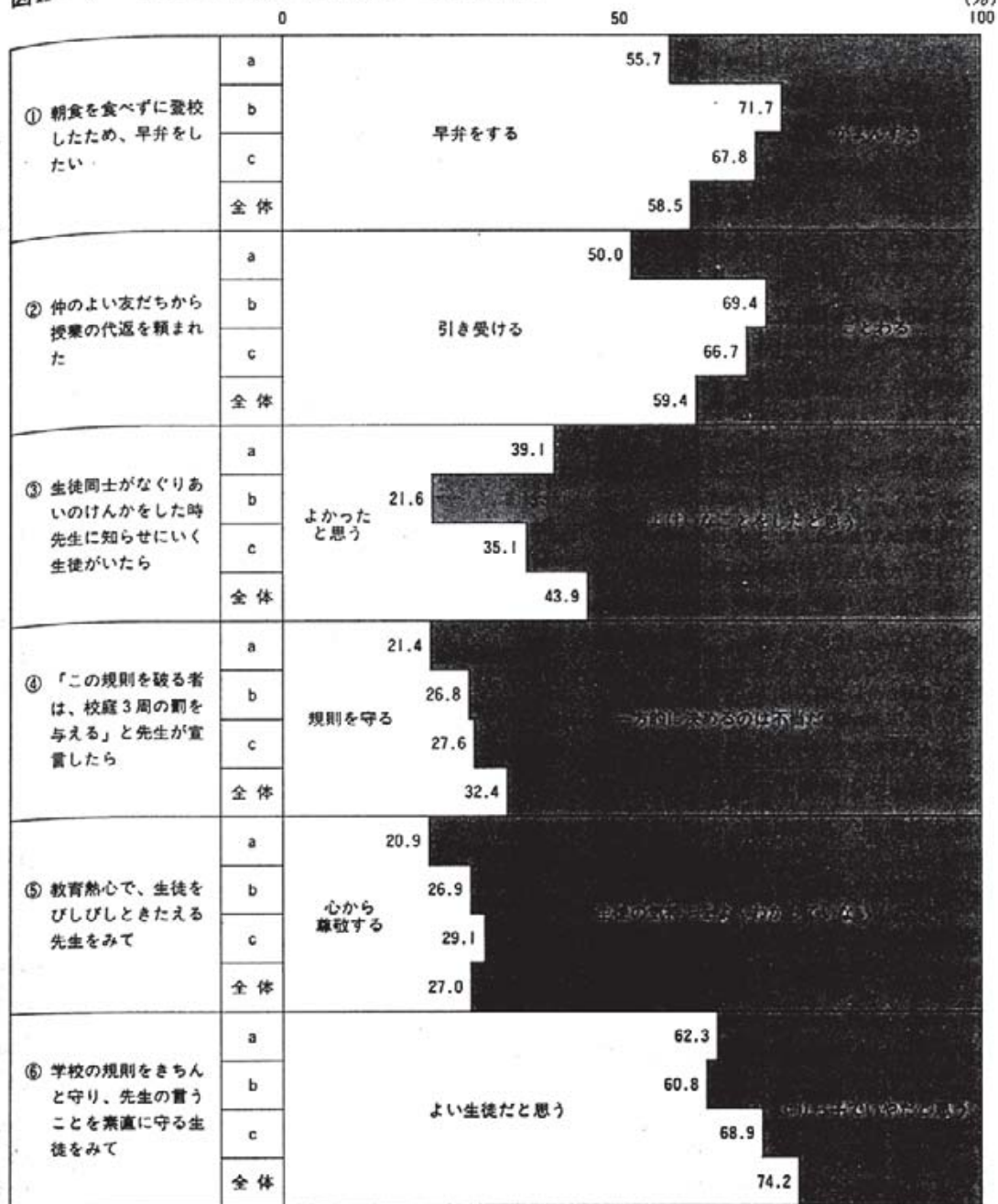
こでもまた傍観者層は、被害・加害者の間で、中間的な意識状態に置かれている。

こうしてみると、「いじめっ子」も「いじめられっ子」も、学校生活や学級集団の秩序の中では、元来ともに疎外された位置にあることがわかる。個人特性にもそれは現れていたと言えよう。学校や学級のように、逃げ場のない画一的で閉鎖性の強い集団組織では、こうした個人的な差異はわずかでも、相互にきわ立たせる結果となり、いじめを加速させる方向に作用しているのかもしれない。

図II-2 将来の職場における自己評価

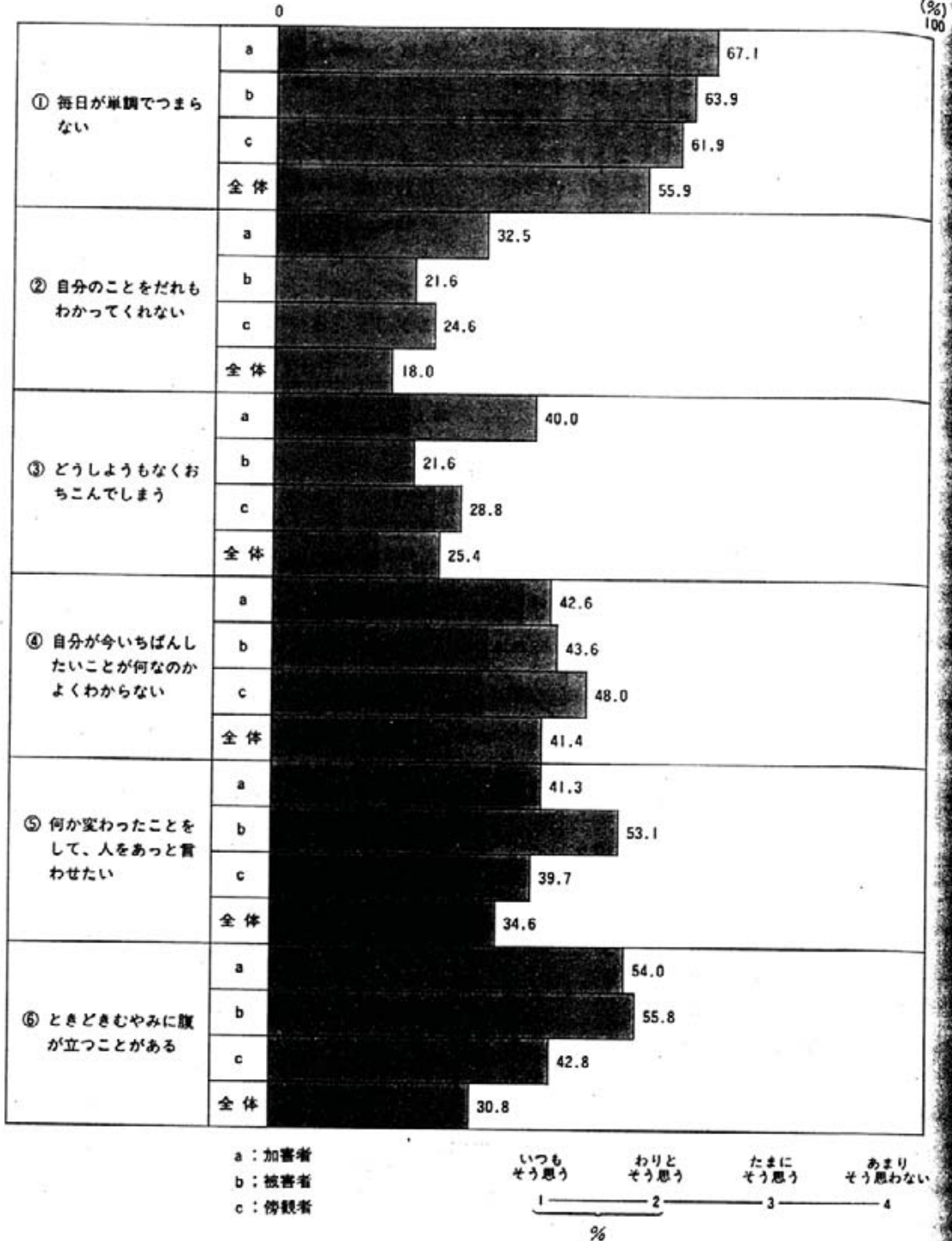


図II-3 「いじめ」体験と学校規範への価値態度



高校に入ってから
 a. いじめにあった(被害者)
 b. いじめに参加したことがある(加害者)
 c. いじめに参加はしないが、止めに入ることはせず、傍観していたことがある(傍観者)
 全体: 単純集計値

図II-4 「いじめ」体験と日常性の感覚



3. 「いじめ」における教室空間

教室を構成するのは、基本的には生徒と教師である。そして生徒—教師関係、生徒同士の相互作用によって、そのクラス独自の雰囲気（空気）が醸成される。高校段階では生徒の関心の広がりや自立心の高まりもあって、クラスへの帰属意識はそれ以前の学校段階よりかなり低下する傾向にある。しかし、教室を支配する空気によっては、いじめっ子に対する集団的圧力として、抑止効果が期待できるのではないだろうか。そうした意味で、「いじめ」のないクラスとあるクラスで、クラスの雰囲気（空気）がどう違うかを調べてみた結果を、図Ⅱ—5に示した。

まず、クラスの中で「いじめ」の有無によって差異が出た項目は、クラスの「雰囲気」(①③⑤)、「まとまり」(②)、「校則の遵守状態」(④)、「担任の指導方法」(⑦)である。担任との接触度が明確な差となって現れてこないのは、高校では教授組織上そもそも全体として生徒との接触頻度が低いという状況を象徴しているものと思われる。図から明らかのように、学級集団が明るく、まとまっていて、しらけた雰囲気もなく、しかも校則やきまりを守らない生徒ややる気のない生徒が少ないクラスには、「いじめ」は発生していない。そして担任の指導もゆるやかである。一方、「いじめ」のあるクラスに対する認知の性差は、男子はクラスの雰囲気が「しらけている」(男子72%>女子54%)とあり、女子はクラス全体のまとまりが「バラバラ」(男子58%<女子78%)であるとみるところに現れている。つまり、男子にはクラスの中に何か熱中できるような集団目標の有無が、また女子には学級集団としての凝集力の有無が、クラス内の「いじめ」の存在に影響を及ぼしているようである。

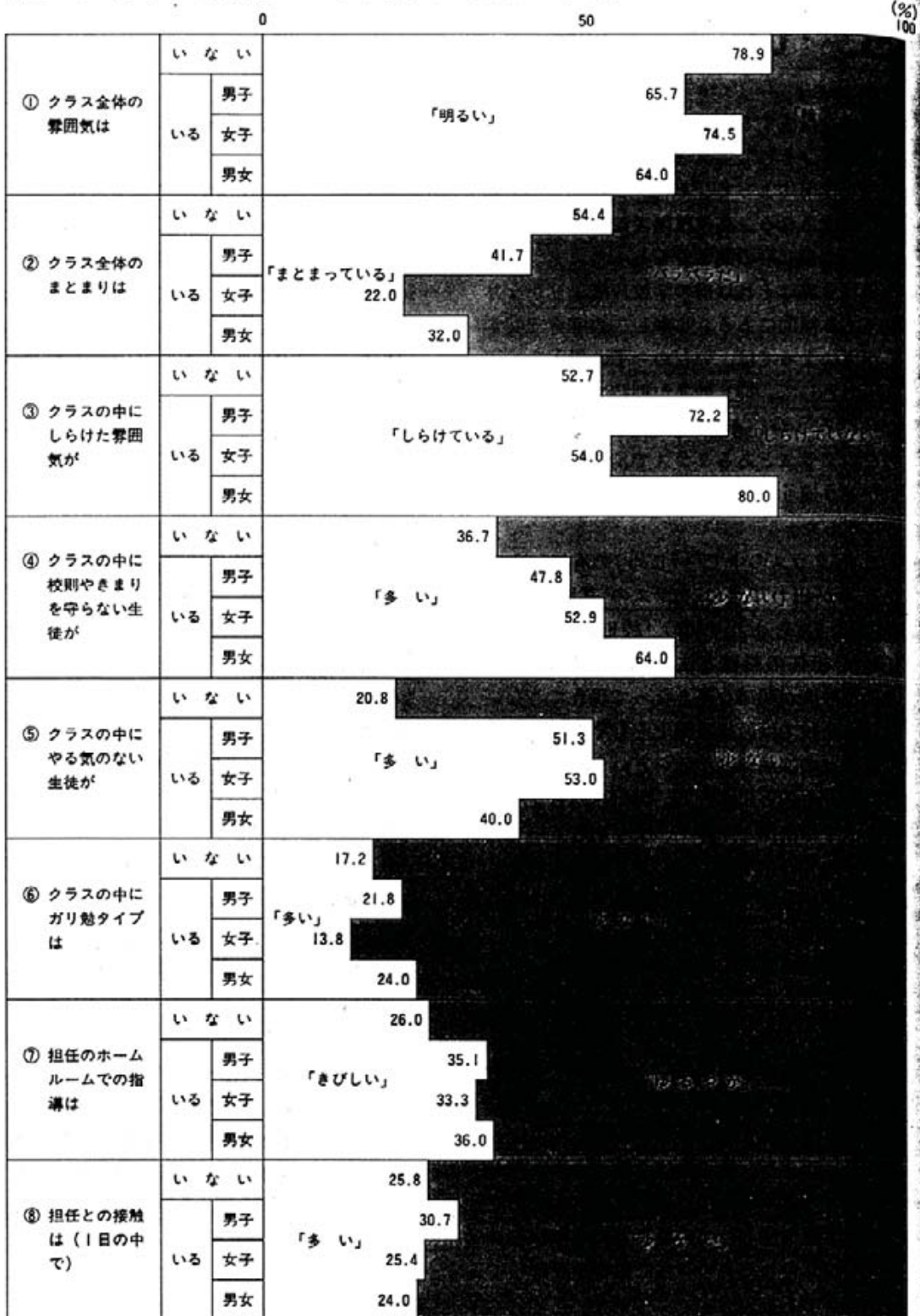
こうした傾向をさらに探るために、「いじめ」のあるクラスの生徒の「日常性の感覚」を

分析してみよう。表Ⅱ—2はさきに図Ⅱ—4で示した6項目の日常性の感覚特性から、「いじめ」体験に関与している3項目をとり出し、各項目がいじめのある「クラス」の性差によってどのように異なるのかを調べた結果である。まずいじめられている生徒がいないクラスでは、「疎外感」や「自己顕示的欲求」「欲求不満」が噴出する傾向は、いじめクラスよりも総じて低く、それだけ学級全体が情動的に安定性を得ていることがわかる。逆に「いじめ」のあるクラスをみていくと、男子・女子ともにいじめられっ子をかかえたクラスの場合、どの欲求項目をとっても高まる傾向がみられ、クラス成員の不安定な意識が潜在化しているようである。性差に関しては、男子に比較的「疎外感」が強く、一方、女子は「欲求不満」がかなり高じたクラスになっている。このことは、「いじめ」を単に体験生徒の個人特性で問題にするだけでなく、「いじめ」を生み出しやすい学級の人間関係や生徒文化などの質を問うなど、集団特性の問題性を改めて指摘する結果だろう。

そこで「いじめ」現象に対する問題認識の型が、何らかの「いじめ」体験をもつ当事者と、「いじめ」からやや距離をおきながらもクラスの中にいじめられている者をかかえている生徒と、さらに全く「いじめ」に関与していないクラスの生徒の三つのタイプでは、どのように異なってくるのかを比較してみたのが、表Ⅱ—3と表Ⅱ—4である。

まず「いじめ」の原因をたずねた反応をみると、一般にはケンカ両成敗的に加害者、被害者の両方に原因を求める見方が圧倒的である。しかしもう少し細かくみていくと、「いじめ」のあるクラスでは、いじめられる本人に原因があるとみる見方がやや多く(いない4%<いる13%)、とりわけ男女ともにいじめられっ子がいる場合には、そうした見方が

図II-5 クラスの雰囲気×「いじめられている人がいるか」



きわめて強くなっている（本人29%＞加害者13%）。ところで「いじめ」体験をもつ当事者の反応を表II-4からみると、傍観者層は「いじめ」の原因を圧倒的に双方に求めていることが明らかである。しかし、被害者層と加害者層では、それぞれに正当化のメカニズムが働いて、原因を相手方に求めている。このよう

にみえてくると、「いじめ」の問題認識一つをとっても、被害者、加害者、傍観者、「いじめ」のあるクラスとないクラスでは、かなりのズレがみられるのである。

そしてこうしたズレは、「いじめがおとなの社会の反映である」というように、問題を合理化する意識の違いにも現れている。「いじ

表II-2 日常性の感覚×「いじめられている人がいるか」

		いつも そう思う	わりと そう思う	小 計	たまに そう思う	あまりそう 思わない	小 計	
自分のことをだれもわかってくれない	全 体	5.6	12.1	17.7	43.5	38.8	82.3	
	い ない	4.9	11.6	16.5	44.1	39.4	83.5	
	い る	男 子	10.4	18.3	28.7	34.8	36.5	71.3
		女 子	7.8	11.8	19.6	52.9	27.5	80.4
		男・女	16.0	12.0	28.0	32.0	40.0	72.0
何か変わったことをして、人をあつと罵つた	全 体	13.8	20.6	34.4	31.2	34.4	65.6	
	い ない	12.4	20.7	33.1	31.6	35.3	66.9	
	い る	男 子	20.9	21.7	42.6	29.6	27.8	57.4
		女 子	25.5	15.7	41.2	25.5	33.3	68.8
		男・女	32.0	20.0	52.0	28.0	20.0	48.0
ときどきむやみに腹が立つことがある	全 体	8.7	21.8	30.5	42.6	26.9	69.5	
	い ない	7.7	21.5	29.2	43.5	27.3	70.8	
	い る	男 子	13.9	22.6	36.5	37.4	26.1	63.5
		女 子	19.6	25.5	45.1	33.3	21.6	54.9
		男・女	20.0	24.0	44.0	36.0	20.0	56.0

○は「いつも+わりと」の肯定率の最大値

表II-3 「いじめ」観×「クラスにいじめられている人がいるか」

① 「いじめ」は、いじめるほうも悪いが、いじめられるほうにも悪い点(原因)がある (%)

		本人に原因	両者に	いじめる側
い ない		4.4	79.9	15.7
い る		12.8	66.5	20.7
い る	男 子	12.4	64.6	23.0
	女 子	5.9	74.5	19.6
	男・女	29.2	58.3	12.5

② 「いじめ」は一時的な流行のようなものだから、おとなたちはあまり騒がないほうがよい (%)

		とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない
い ない		13.6	34.4	52.0
い る		13.7	34.2	52.1
い る	男 子	10.4	34.8	54.8
	女 子	11.8	25.5	62.7
	男・女	33.3	50.0	16.7

③ おとなの世界に「いじめ」があるから、子どももそれをまねしている (%)

		とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない
い ない		20.7	42.7	36.6
い る		28.6	37.5	33.9
い る	男 子	26.3	42.1	31.6
	女 子	31.4	29.4	39.2
	男・女	33.3	33.3	33.3

め」のあるクラスほどそうした見方を支持する傾向が強く（「とてもそう思う」あるクラス29%>ないクラス21%）、また被害者層ほど「いじめ」をおとなの社会に根ざす問題の現れであると認識している。

これまでみてきた点から、いじめられっ子が

「いじめ」の標的として仕立てあげられていくのは、個人特性のレベルを越えて、こうした学級集団のなかに「いじめ」について、それ自体が悪いことであるという確かな認識が、生徒間に十分確立していないところに、大きな問題がある可能性を指摘しよう。

表II-4 「いじめ」体験×「いじめ」観

(%)

	いじめの原因		
	本人に原因	両者に	いじめる側
a	13.3	62.7	24.0
b	21.8	70.9	7.3
c	8.3	75.2	16.5
	一時的な流行のようなもの		
	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない
a	25.3	26.7	48.0
b	17.3	31.8	50.9
c	11.7	36.8	51.5
	おとなの世界のまね		
	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない
a	37.3	36.0	26.7
b	23.6	35.5	40.9
c	24.8	39.5	35.7

タイプ a：高校に入ってから被害者層
 b：高校に入ってから加害者層
 c：高校に入ってから傍観者層